

〈Qf キューブ〉—像が積層する立方体そして絵画の位置

僕が絵を描くのは、知っているものや見えているものを描くことなどではなく、世界を見てみたい、世界に触れてみたいからに他ならない。

なぜならまだ僕たちは世界を知らないのだから。

そしてリアリズムが現実の肯定だとするならば、僕をイデアリストと言った人の考えを肯定したい。

今回 TAGA では〈Qf キューブ〉の展示である。2001年に開始された〈Qf〉系は、ルブリョフの《聖三位一体》、イエスの手、阿弥陀如来の印相をモデルにして、2009年以降は90 cm角の板を支持体とする〈Qf・Holz 90〉として取り組まれている。

さて一体「絵画が現出する場」とは？ 絵画／像は「現実・リアルの世界」と「精神だけの非物質の世界」のこの二つの世界のわずかに重なり合う両義の場に薄い膜として生成し、精神の世界を背景にリアル、現実の世界に働きかけるのだと僕は考えている。

〈Qf キューブ〉が模索しようとするのはその架空の空間性であり、そこでは無数の像が積層され立方体を形成しているのだ。

今展は、新作〈Qf・Holz 90〉2点、〈Qf キューブ〉、そして〈Qf キューブ プランドローイング〉によって構成されることになる。

母袋 俊也